

アクセント核はどこから来たか¹

Where do accent kernels come from?

児玉 望

KODAMA Nozomi

はじめに

1. 2音節名詞の下降の有無の分布
2. 核の種類の変更を含むアクセント変化
 - 2.1. 上げ核の昇り核化
 - 2.2. 上げ核の降り核化
 - 2.3. 降り核化を経た無核化と語声調化
 - 2.4. ピッチ・アクセント体系の波状的分化
3. 改新としてのピッチ・アクセント化
 - 3.1. II-4/5類の日琉分裂対応の語声調祖体系による説明
 - 3.2. 改新としての上げ核化
 - 3.3. 改新としての琉球3型化
 - 3.4. 側系統としての九州諸体系

おわりに

はじめに

もう20年以上も前になるが、国際日本文化研究センターの『日本語の起源について—大野晋教授のタミル語起源説をめぐって』と題するシンポジウムに参加したことがある。言語の同系仮説というのは、その仮説によって起源を共通とする諸言語がどのような変化を経てきたかを明らかにすることができてはじめて価値をもつのであり、タミル語起源説はドラヴィダ語史研究にも日本語史研究にも今のところなんら新しい知見を加えてはいないので発展性がない、という批判を大野晋先生ご本人の前で展開したものの、全く相手にされることなく敗退した、という苦い思い出だけの残ったシンポジウムである。4人で束になっても大野晋先生にはかなわないという判定にもかかわらず、『日本研究』のフォーラム投稿として掲載の機会を与えていただいた論文の末尾で、筆者は、今後の日本語起源説に求められるものとして、日本語のアクセントの発生を説明できるものでなければならぬと述べた。これは、日本語諸方言のアクセント研究が、アクセントによる弁別を共通祖語に遡る音韻特徴であるとした上で、それがどのような変化を経て現在に至ったかを説明する、という研究の蓄積として、筆者の比較言語学観を形成する上で大きな影響があったこ

¹ 本研究はJSPS 科研費（課題番号15K02484）の助成を受けたものである。

とを主張したかったからである。

シンポジウムの若手研究者リーダーであった長田俊樹先生からは、その後、2回にわたって日本語系統論に関する日文研共同研究会にお誘いいただいたが、今年度の共同研究会「日本語の起源はどのように論じられてきたかー日本言語学史の光と影」でアクセント史についての研究会を企画していただくようお願いしたのは、このようないきさつによる。XとYが共通の起源をもつと主張するということは、X及びYに至るどんな変化があったかを説明することである、という単純明快な論理に基づいて「まっとうな」比較言語学研究が行なわれてきたことを、特に日本語系統論に関心をもつ人に広く伝える必要があると感じたからである。共同研究会の研究成果刊行物には、このような研究史的側面を中心に書くつもりである。

一方、こちらの論文では、筆者の共同研究会での発表のうち、より言語学的内容に関わる部分の多い、近年の研究動向を踏まえた筆者のアクセント史仮説を中心にまとめる。日本語アクセント研究は、アクセント史に関わる通時的研究だけでなく、各方言それぞれがもつ共時的な体系の分析においても、大きな進展を遂げている。その結果、共通の祖形から分岐した「XとY」を、新たな枠組みで捉え直すことが可能になっている。このうち、特に2つの枠組みに注目して仮説を組み立てていく。

ひとつは、「アクセント核」とその種類の違いに関わる分類の枠組みである。日本語アクセントの記述は、相対的に高いピッチが現れる「アクセントの山」がどこにあるか、という音声的な側面の観察から、たとえば東京方言においては高から低への「下がり目」の位置が弁別的で不変の特徴である、という弁別特徴の抽出という音韻分析を経て、弁別対立を担うのは上昇や下降の契機（モーラの境界）であるのか、あるいは、特定の音節あるいはモーラに上昇や下降を引き起こす力をもつ「アクセント核」があるのか、といった理論的精密化が行なわれてきた。後者の立場は、上野善道(1975)で提案された、後続音節の上昇/下降として実現する、上げ核（以下、本論文では²T*["と表記する）と下げ核("T*[")、先行音節の上昇/下降として実現する、降り核("]T*")と昇り核("["T*")の4種類の核の区別が定説となっている。上野善道(1975)は、現代日本語方言において、降り核以外の3つの核が実証されることを示しているが、これはつまり、これらの核の種類が変更されるような

² “T”は“H”「高」や“L”「低」の段階を区別しないモーラを表記し「O」に相当する。“]”と“[”は、“T*”「核」を伴わない場合はそれぞれモーラ間の下降契機と上昇契機。「上昇調モーラ」と「下降調モーラ」を、H, L との組み合わせでは“R”と“F”で、語例ではモーラの直前の“[[”（ただし使用例なし）と直後の“]]”で表記する。

変化が生じた、という比較言語学的事実を示している。

このような、核の種類の変更を伴うようなアクセント変化を、例外的・個別的な現象としてではなく、日本語アクセント史の根幹に据え、上げ核と下げ核の2種類をもつ祖形からの変化としてアクセント史を再建した論考としては木部暢子(2008)がある。2節では、児玉(2014)で提案した境界声調仮説を組み込んで、ピッチ・アクセントの祖体系は上げ核と境界下降の組み合わせから成っていたとする仮説を立て、Uwano(2012)の下げ核から昇り核が生じたとする説よりも、上げ核から下げ核や昇り核が発生したとする木部説を支持する根拠を述べていく。

もうひとつの分類も、「アクセント核」と関連する。方言アクセント体系の中には、語の音節数が増えると可能なアクセント対立が増えていく体系と、語の音節数が増えても型の区別は一定数であり、かつ、音節数の違うこれらの型に何らかの系列性がみられる体系があることが、1970年代以降注目されている。上野善道は、前者を多型アクセント、後者をN型アクセントと呼ぶ。早田輝洋(1999)は、前者を、アクセント核の有無と位置対立に基づくピッチ・アクセント体系、後者は、語を単位として声調の種類が弁別される、語声調体系と分類した。いずれの分析を取るにしても、比較言語学的には、前者から後者が発生したのか、後者から前者が発生したのかが問題になる。松森晶子(1993)は、ピッチ・アクセント体系が成立するのが本土祖体系以降であるとする説を唱える。

早田説の立場では、語声調はアクセント核と組み合わせることが可能な別の音韻要素ということになるが、木部(2010)は、この立場で祖形にアクセント核と語声調の両方をもつ体系を立て、語声調(式)の区別を失った位置アクセント体系に対し、鹿児島方言の2型アクセントは核の位置による区別を失った語声調体系であるとして分析している。これに対して児玉(2014)は、九州諸方言の共通祖語形はそもそもアクセント核がない語声調体系であり、九州の外輪式体系(豊前式)がアクセント核の位置対立を獲得したのに対し、アクセント核を獲得しないままに声調の弁別を減らしたのが九州の諸方言であるという可能性を指摘した。

3節では、児玉(2014)の視点を九州外にまで広げ、琉球祖体系が3型アクセント体系であったとした場合に、そこからさらに遡って日琉祖体系も語声調体系であり、本土諸方言の多くはアクセント核の発生という改新を経ている、とする解釈が可能であることを論じる。このように新たに生じたピッチ・アクセント体系が2節でまとめたような共通本土祖体系に遡るとすれば、おそらく語声調体系としての祖体系からピッチ・アクセント共通祖体系への改新は、日本語が日本列島各地に広がって分化をはじめる前に、どこかで起きた単一

の改新であるとみることになる。

日文研共同研究会でこの研究発表のタイトルを「核はなくなるのか」としたのは、2節と3節で扱う論点が、ともにアクセント核の生成・消去に関わる問題だからである。3節の問題は、有核の語と無核の語が共通の祖形をもつとすれば、核が生成したと考えるのか消失したと考えるのか、ということである。また、アクセント核を認める立場では、ある音形が無核であるか有核であるか、有核の場合どこに核があるかの解釈は、音韻解釈でどの核を認めるかによって変わってくる。祖語に想定する核の種類を変えれば、同じ変化が核の生成・消去に関わる変化であるのか、そうでないのかの解釈が変わる。金田一春彦氏の長年のアクセント研究の蓄積ともいえる、型の区別のもっとも多い名義抄式を祖体系とする通説は、祖形に（式のほかに）下げ核のみを認める立場で解釈すると、無核型に核が発生する変化と、下げ核が位置を変える変化が各地で繰り返し起きたとする説であり、一方、外輪諸体系が共通に経たとされる核の消去は、一回性ともみられる変化であることが特徴的である。児玉(2014)は、この変化で消去されたのは下げ核ではない、とする立場をとったので、「核はなくなるしない」とも読めるタイトルとしたが、位置アクセントの祖体系が下げ核体系でないとすれば、核の消去を含む変化もありうる。

この点を念頭に、1節では、膨大な先行研究の蓄積について、下げ核体系としてみた場合のアクセント核の生成と消去に関わる論点のみに焦点をあてる形で簡単にまとめる。これらの先行研究が説明してきた諸方言での有核型と無核型の分布について、これにかわる説明を与えること、特に、どのようにして核が生成し、どんな条件で核が消去したかをうまく説明することが本稿の目標である。

1. 2音節名詞の下降の有無の分布

諸方言アクセントの対応関係を示してアクセント変化を再建する試みは、ポリワーノフにはじまるが、『方言』誌の1931年創刊号からの服部四郎氏による「国語諸方言のアクセント概観」の不定期連載でも試みられている。東京アクセントと亀山アクセントの比較からはじまる氏のアクセント研究は、服部(1931)で、四国と近畿、山陽と東方の共通性から、前者を甲種方言、後者を乙種方言として、この間の「アクセントの著しい相違が非常に古く生じた」とする見解に達し、「民族移動の如き事実も考えられない事はな」いこの地理的分布を、その外縁に位置する諸体系が甲乙二種のいずれに結び付けられるかという問題とも結び付けて、祖語からのアクセント変化によってどう説明するかを試みがはじまる。

平安時代後期に編纂された『類聚名義抄』の声点の付し方に応じた2モーラ名詞の分類が、弁別的アクセントをもつ現代諸方言のアクセント型の対応をよく説明することを発見

した金田一春彦(1937)以降、この類別に応じたアクセント変化の再建が試みられている。名義抄体系を祖体系とする通説の骨格は、この金田一論文を受けた服部(1937)ですでに現れているが、同じ論文の中で氏はこの立場を放棄し、名義抄体系以前に祖形を求める再建仮説を示している。同じ方向の服部(1951)は、1943年の未発表の原稿と、1944年の研究会で発表されたその修正案を収録したものであり、2つの異なる再建仮説を含んでいる。

金田一春彦(1937)以降、2モーラ名詞は5つの類に分類されるが、ピッチ・アクセント体系をもつ現代諸方言を比較すると、この5つの類のすべてについて、無核型となる方言と有核型になる方言が分かれる。つまり、どの類についても祖形に下がり目のない型を再建するか、ある型を再建するかに応じて、その後の方言分化をアクセント核の生成（有核化説）とみるか消失（無核化説）とみるかの二つの可能性がある。名義抄式体系の発見された時期は、宮田幸一氏の提案する「アクセント中核」はまだ受け入れられておらず、また、服部四郎氏が「アクセントの山」に代わるものとして1950年代に提案した「アクセント核」を、通説の骨格を作った金田一春彦氏は共時的分析においても受け入れていないので、「有核」／「無核」という用語は必ずしも適切ではないが、佐久間鼎氏が東京アクセントにおいて「起伏式」と「平板式」を区別し、東京アクセントの動詞の分類として初期の方言比較に基づく服部氏のアクセント系統論において重要な根拠とされたように、下降の有無とその説明は、アクセント史研究において常に重要視されてきたとあってよい。

II-1： 飴・顔・風・酒・箱・牛・鳥・水・・・

名義抄：上上

無核：讃岐、中央、垂井、能登、内輪、中輪、外輪

有核：加賀、隠岐3型(A)

1モーラ名詞のI-1類、3モーラ名詞のIII-1類と共通になる方言が多い。祖体系で明示的に有核であったとする説は管見ではない。ただし、服部四郎(1937)は鹿児島方言や首里方言での下降を考慮して、助詞が下降調を取る祖体系を立て、名義抄式の前に平板化の改新が起きたとする。また、松森晶子(1993)は、下降式の前段階として本土祖体系に(HL)(H)のようなくぼみ音調を再建している。

(有核化) 金田一(1972, 1977)は、加賀・隠岐3型について、Hの後退による全低化を経て語頭核が発生したという変化を想定する。これに対し、上野(1988)は、祖体系の下降式無核が第2音節下げ核に変化したとする。

真鍋島のようにⅡ-5類と合流した体系もある。

Ⅱ-2：岩・歌・音・川・胸・石・橋・町・・・

名義抄：上平

無核：外輪

有核：讃岐、中央、垂井、内輪、中輪、加賀、能登、隠岐3型(B)

I-2類、Ⅲ-2類と共通になる方言が多い。ただし、中輪式I-2類は無核、隠岐3型I-2類はAで共にI-1類と合流する。金田一春彦(1937)で確立された類であり、Ⅱ-1類との弁別の喪失が「外輪式」という東北、出雲、東海、九州と地理的に分断された諸体系が共通に経た改新とみなされる。

(無核化) 服部(1937)は、祖形として第2音節に下降調を設定し、外輪式ではⅡ-1類と同様な高平化を経たのに対し、名義抄式や中輪式では高低の音形に変化したとみる。通説では名義抄式の音形を祖形とみて第2音節を低とする。

(有核化) 松森(1993)は、本土祖体系のLLがFLを経て名義抄式でHLとなったとする。児玉(2014)では、名義抄式にみられる下降を、祖体系では「境界特徴」であり核ではなかったとして、これが下げ核と合流するのは中央式を中心として地理的に隣接した地域に共通する改新であるとする。

Ⅱ-3：池・米・花・物・山・岸・月・耳・・・

名義抄：平平

無核：讃岐

有核：中央、垂井、内輪、中輪、外輪、加賀、能登、隠岐3型(B)

Ⅲ-4類と共通になる方言が多い。名義抄式の低平からの高起有核化とその結果としてのⅡ-2類との合流は、京都では室町時代以降の資料で確認されている。連低類の高起化として通説となっているこの変化は、すでに服部(1937)で*LL(H)>*HL(H)>HL(L)として定式化されている。ただし、服部自身は、同じ論文の中でこの分析を、甲種(中央)が乙種(内輪・中輪・外輪)より古いという自身の古い考え方に基づくとして放棄し、乙種と同形のLH(L)を共通祖形としている。

(有核化) 連低類の高起化(通説)。乙種方言ではこの変化と核の後退がⅡ-4/5類の語頭

核化に先行して完了していたとみななければならないが、服部(1937 旧説)は、乙種方言での変化を、甲種方言で同じ変化が起きるよりずっと前の現象であるとする。通説では、連低類の高起化を甲種と乙種に共通の変化とみなすが、これが波状的に広がった単一の変化であるかどうかについては明示的な見解がない。

(無核化) 服部(1937 新説, 1951 旧説)では、乙種方言では祖形から変化がなかった(LH)のに対し、名義抄式の先行段階や讃岐で H の後れによって低平化が起きたとする。服部(1951 新説)では、乙種方言でも、祖形(LF)の第 2 音節の下降調が H に変化するという改新を仮定する。

II-4 : 板・肩・空・種・舟・息・海・箸・ . . .

名義抄 : 平上

無核 : 讃岐、中央、加賀、能登、隠岐 3 型(C)

有核 : 内輪、中輪、外輪

この類が有核になる体系は、II-5 類と合流するものがほとんどであるが、出雲の外輪式では語頭核が現れるものが II-5 類に限られる。「垂井式」は、この類が無核になるものと有核になるものが分かれる。I-3 類と共通になる方言が多い。

(有核化) 名義抄式が祖形に近いとみなす立場 (通説) では、内輪・中輪・外輪の語頭核発生を改新とみなす。服部(1937 旧説, 1951 旧説)では、*LH(H) > *LL(H) > HL(L) として II-3 類と同様な変化を仮定しており、この変化が通説にも採用されている。ただし、内輪・中輪の体系のように II-3 類との弁別が維持されるためには、*LL(H) > HL(L) の変化が起こる前に II-3 類において *HL(L) > LH(L) への変化が完了している必要がある。一方、II-3 類が II-5 類と合流しないためには、II-5 類が *LH(L) > *LL(H) によって先に II-4 類と合流していたと考えなければならない。

II-3 類 LL(H) > HL(L) > LH(L)

II-4 類 LH(H) > LL(H) > HL(L)

II-5 類 LH(L) > LL(H) > HL(L)

(無核化) 服部(1951 新説)では、FH(H)を祖形として、この FH が乙種で有核の HL、甲種で無核の LH に変化したと考える。

II-5 : 雨・雲・声・鍋・窓・秋・猿・露・ . . .

名義抄：平上

無核：隠岐3型(C)、加賀³

有核：讃岐、中央、能登、内輪、中輪、外輪

名義抄式の声点資料では、助詞接続の場合を含めⅡ-4類との区別がない。このため、これらの類の分裂を中央式を中心とする諸方言の改新とみる立場をとる研究者もいるが、声点では表記されなかった弁別が平安時代や祖体系でもあったと考える研究者が多く、通説もこの立場をとる。外輪の松江方言でこの類の区別が残存している可能性を最初に指摘したのは服部(1937)である。服部(1951 旧説)ではこの祖形として乙種と同じHLを立てるが、服部(1951 新説)では、Ⅱ-4類に似たくぼみ音調FH(L)に改めている。この類が無核になる加賀、隠岐3型は、共にⅡ-4類と合流している。

(無核化) Ⅱ-4類と合流して有核化している内輪・中輪・外輪については、通説では有核化に先立ってHの一拍後ずれによる無核化を想定する。加賀・隠岐3型についても同様の変化のあと、有核化が起きなかった体系であるとみることもできる。ただし、金田一(1972)は、隠岐3型については中輪あるいは内輪の有核化からさらに一拍ずれにより無核化する再建を行なっている。

(有核化) 児玉(2014)は、Ⅱ-2類の場合と同様、語末下降は本来は核ではなく境界特徴であり、これが核となるのは中央式の改新であるとする。

当初から問題になったのは、甲種(中央)と乙種(内輪・中輪・外輪)の関係であった。名義抄体系で下降があるのはⅡ-2類とⅡ-5類だけである。名義抄体系を祖体系と同一視する通説では、無核化は、外輪でのⅡ-2類の無核化と、乙種のⅡ-5類の語頭核化に先行する無核化となる。後者は、Hの後れで説明される。有核化は、甲種・乙種に共通するⅡ-3類と、乙種だけが経たⅡ-4/5類のものがあるが、両者は時間的なずれがあるものの、アクセント変化としては同一のものである。Hの後れは、その後ろの下降が維持されればアクセント核の後ずれであり、乙種のⅡ-2/3類で、Ⅱ-4/5類の有核化に先行して起きた変化と共通である。少ない種類の変化で多くの変化を説明できるたいへん説得力のあるものであるとよい。

金田一春彦氏は、この説から可能な音調変化を検討し、甲種・乙種以外の方言の分化を、

³ 新田哲夫(1985)は、Ⅱ-5類は類としての纏まりを欠くとしている。

型の統合を手がかりに再建した上で、名義抄体系からの「自然な音調変化」の積み重ねとして説明する「通説」を作り上げた。たとえば、九州諸方言(金田一 1954)と琉球諸方言(金田一 1960)は共に、外輪体系を祖体系とする系統分化として説明される。

問題は、この変化の空間的・時間的分布である。内輪・中輪・外輪という名称が示すように、乙種諸方言は地理的に不連続な複数の方言群を包含する。方言地理学的には、地理的に連続する特徴が、別の特徴の共通する地域を分断している場合、前者が改新形であるとみなすのが普通である。Ⅱ-2類の無核化、Ⅱ-4/5類の有核化といった乙類側の改新変化を認めると、同じ連続した変化が複数の地域で同じ順番で起きる、という確率の低い事象があったと仮定することになる。一方、甲種・乙種に共通のⅡ-3類の有核化(連低類の高起化)は、東北から琉球に及ぶ広い地域で連続的に分布しており、地理的に波状的に進行した単一の変化である可能性があるのであるが、文献資料から京都でこの変化が起きたのは平安後期と室町期の間であると考えられており、方言分化を特徴付ける変化としては遅すぎる。単一の変化でないとすれば、やはりこの変化も各地で複数回起きた変化のひとつと見なければならぬ。

特定のアクセント変化が複数回にわたって起きうることを説明するためには、「自然な音調変化」がある特定の音声的条件が整えば高確率で発生することを証明しなければならないが、アクセント変化の実例だけでは統計的にじゅうぶんなサンプルがそろわないのではないかと考える。

服部四郎氏が問題としたのもこの点であり、服部(1937 新説)以降の各祖形案は、服部(1951 新説)まで、下降をもつ型を名義抄体系より増やす方向で進行している。服部(1951 新説)の祖体系では、乙種系の核の位置に下降調を配しており、甲種ではこれがLとなり次音節を上げる変化、乙種ではこれがそのままHとなって次音節が高ければ下げる変化を想定しているとみられる。次節で述べる核の種類論からいうと、甲種では上げ核に、乙種では下げ核に変化する下降調音節をもつ祖体系、といってもよい。

同様な問題意識に基づく系統仮説には、ラムゼイ(1975)やそれを受け継いで Elizabeth de Boer(2010)が主張する、名義抄式の平、上の声点表記は実は通説とは逆に、平がH、上がLだったのではないかと、というものがある。この場合、下降があるのはⅡ-3、Ⅱ-4、Ⅱ-5の各類であり、Lに先行するHに核があるとすれば、祖形の核の位置は外輪体系の音形と同じであり、中央式体系側で核の有無や位置の変更を含む改新が進んだ、という解釈が可能になる。ただし、核の有無や位置の問題だけであれば、平、上の解釈を変えなくても、祖形の核が下げ核ではなかった、という方向で見直すこともできるはずである。

児玉(2014)では、名義抄式体系で下降のあるⅡ-2類とⅡ-5類（及びⅠ-2類、Ⅲ-2類、Ⅲ-7類）について、この核は祖形では核ではなかったとし、先行する段階ではすべての類が無核であり、メロディーと境界特徴のみで区別される語声調体系であった可能性があると主張した。ただし、この分析では、上昇の位置の違いを直接、メロディー（緩昇/急昇）の違いとして分析しており、上昇位置の違いを核の位置対立として分析できる可能性を検討しなかった⁴。次節では、木部(2008)を参照の上、これに境界特徴説を組み合わせた分析を試みる。

2. 核の種類の変更を含むアクセント変化

服部(1954)は、その位置や有無が「アクセント素」の弁別的対立を担い、モーラに指定される音韻論上の要素として「アクセント核」を導入し、「アクセントの型」や「アクセントの山」といった術語は音声学的概念に限定したいと述べた。柴田(1955)は、東京方言のアクセント核を次の音節を下げるのではなく、下がった音節側に「くだりアクセント核」をもつものと分析し、現代京都方言に「のぼりアクセント核」と「くだりアクセント核」を認め、さらに2型アクセントである颯娃方言をのぼり核とくだり核の対立、蓮田方言や鶴岡方言・宮古方言をのぼり核のみをもつ体系として分類した。

服部(1973)は、そこから降る「高(低)核」(降り核; T*) や、その直前の音節が低くそこから高くなる「(低)高核; [T*] (昇り核) に対し、次の音節を上げる「低(高)核」(低昇り核; T*[]) を導入し、奈良田方言や名義抄式体系をこれら二種類の核の組み合わせとして分析できることを示した。上野(1975)は、さらに「(高)低核」(JT*) を導入し、これらの核を用いて、服部(1973)で分析されたものを含むさまざまな体系の再解釈を提案した。特に拙論と直接関係するのはJT*の導入で、京阪アクセントの形成過程に実証される連低類の高起化を、このJT*が1モーラ前に位置を変えてT*に変化する核種変化として説明し、現代京都方言の低起化を先行T*に変化できない語頭にのみ残存したJT*とみる分析を提案している。

上野(1975)の詳述する、これらの4種の核の区別は以下のようにまとめられる。

- A. 方向性：上昇核 (T*[, [T*] 対 下降核 (T*), [T*])
- B. 線状性：順行核 (T*), T*[] 対 逆行核 ([T*, [T*])

このうち線状性については、上野(1992)で詳しく述べられているように、逆行核が先行モーラのピッチを反線状的に変える力とする見方から、順行的に、核のある音節を上昇あ

4 児玉(2014)の投稿に際し、査読者の一人から木部説への言及がないのは不当ではないかという指摘があった。この時点で筆者は木部(2008)を読んでおらず、木部(2010)への言及が必要だと誤解して自説との違いを加筆した。

るいは下降する力へと上野氏自身が解釈を代えているので、線状性の対立は、方向性の実現のタイミング（逆行核で核のあるモーラ、順行核で次モーラ）による対立とみることになる。この見方をとると、同じ方向性をもつ2種類の核の違いは、環境による音声的实现の違いを考慮すると、連続的になる可能性がある。言語変化の問題としてみると、同じ方向性をもつ核の間での核種変更の変化は、環境に応じて異なる可能性があると考えられる。

環境に応じた実現の例をあげる。順行核を語末核にもつ場合、あるいは、逆行核を語頭核にもつ場合は、方向性の実現はそれぞれ、後続語の語頭あるいは先行語の語末との間のピッチ変化として現れることが期待される。このため、後続語や先行語がない場合をはじめ、この発現が妨げられる場合には、たとえば、東京アクセントのハナ(鼻)に対するハナ*] (花) のように無核型の実現形との弁別が失われる場合がある。しかし、川上蓁(1953)が挙げた「鼻高しと花高し」で「高し」に句頭の上昇がありタが「低」にならない場合の「花高し」の「音調の谷」や、京都市方言で語末下げ核をもつ「雨」単独の発話での語末下降調のように、方言ごとに、また環境によって、方向性が隣接モーラではなく核のあるモーラ自体に発現する場合もある。このような、上昇や下降のタイミングのずれが、語頭核・語末核や特定の音節構造のみで進行した場合には、順行核と分析するか逆行核として分析するかに応じて、タイミングがずれた側かずれない側かのいずれかで核の位置が1モーラ変化したと見なすことになるだろう。

一方、上野(1975)では、さらに「高核」([T*])を立て、鶴岡方言・雫石方言や隠岐五箇方言の分析の分析に用い、また、「低核」([T*])の可能性について論じている。「高核」は、東北諸方言のように、先行側の方向性と後続側の方向性のどちらがより弁別性に関わるかに応じて、いずれかに再分析される可能性があることに言及しているが、このような体系の存在は、方向性を変えるような核種変更の変化の過程を示すと考える。

このような核種変更の考え方を全面的にとりいれて、日本語アクセントの主要アクセントの経てきた変化を再建したのが、木部(2008)である。祖形としては名義抄アクセントの音調形を採用し、これをH(高起),L(低起)の二要素から成る式と、上げ核(T*[H])と下げ核(T*[L])の組み合わせによって音韻解釈したものを提案している。上げ核と下げ核の組み合わせと位置は、服部(1973)のものと共通である。ただし、取り扱うのは2拍名詞の金田一の類別5類と、3拍名詞7類のうち、京都での改新の可能性がありアクセント比較では除かれることの多いⅢ-3類を除いた6類のみである。上げ核をもつ型はすべてL、もたない型はすべてHであるので、H/Lの組み合わせは冗長にも見えるが、名義抄体系を祖体系とする限り、語頭のLが一貫して先行語末のHより低いことを上げ核の性質としては説明で

きないので、この説明のためには段階 H/L の区別が必要である。

児玉(2014)では、名義抄体系の下降は本来は核ではなかったという仮説を提案したが、この仮説を木部(2008)に組み合わせると、以下のようになる。上げ核のみを核として L*[でマークする。1~3 音節の各類は、上野(2006: 37-38)の追加された類別に従う。ただし、+をつけた類の a/b への分割⁵については、再建仮説に基づくものであり、祖体系に遡らない名義抄以降の改新形の可能性があるものとして保留する。

(1) 上げ核体系としてのピッチ・アクセント祖体系

I -1	H	II -1+	HH	III -1+	HHH
I -2	H]	II -2	H]L	III -2	HH]L
				III -4	LLL*[
		II -3	LL*[III -5a	LL*[H
				III -5b	LL*[H]
I -3	L*[II -4	L*[H	III -6	L*[HH
		II -5	L*[H]	III -7+	L*[H]L
I -4	R	II -6	RH	III -8	RHH
I -5	R]	II -7	R]L	(III -9	R]LL)

無核の各型は、H, R にはじまる二つの系列で共に、下降のあるものと下降のないものが対立する。核をもつ型では、それぞれ、語末以外の位置に核をもつものがそれぞれ、下降のある型とない型の対立を成していることになる。ただし、III-9 類のエヤミ「疫病」は明らかに複合語であり、ヒムカ「日向」(FLL) や III-3 類に属する語末に LL をもつ他の複合語と同様、名義抄体系の複合語アクセントとして除外すべき可能性がある。

「下げ核」とされた下降が位置対立ではなく、下降の有無による二項対立であると考えれば、これはアクセント核ではなく、むしろ、「高結式」と「低結式」とでもいうべき「種類の対立」とみなすことになる。児玉(2014)では、このうちの低結式の下降が核に変質していく過程を、中央式体系から拡散した波状的な変化とし、この波の及ばなかった外輪諸体系や九州の体系では下降の有無による型の対立をそれぞれに失ったとする。早田(1968)は、名義抄体系を木部(2008)と似た上昇・下降により分析するが、語末のものを含めて L に上昇(「低から高のかわりめ」)を付している点が異なる。早田(1997)では、H には低接する(低起)付属語が、語末 L の後では下降調(HL)で現れやすいことを述べており、この

⁵ II -1b, III -1b, III -7b。いずれも語末核(下げ核)の存在を仮定するものである。

現象は、名義抄体系の段階ですでに語末音節の L が核（上げ核）としての性質を帯び始めていたと解釈できる可能性がある。

低結式の下降が核にならなかった外輪などの諸体系で、高結式との対立が失われる過程を、児玉(2014)では、境界特徴としての性質から、付属語のアクセント上の独立の喪失と境界削除によって説明できる可能性があると主張した。しかし、II-5 類（ア[メ]「雨」）のように低結式の下降が語末音節ではなく語境界に現れる場合の高結式との対立の中和が本来の低結式の付属語接続を反映していたとすれば、高結式と低結式の対立が発現したのは、H で終わる名詞に高起の付属語が接続する場合（平進か、語調の谷があるか）に限られたとみられる。そうであれば、高結式と低結式の対立が失われるのは、付属語の独立性喪失に限らず、付属語の低起化、名詞側の語末の H>L の変化など、複数の可能性が考えられる。これは、I-1/2 類、II-1/2 類、III-1/2 類の統合という各地の外輪と九州・琉球の諸体系に共通する改新が、単一の改新ではなく、個別的に（方言ごとに、また、場合によっては類ごとに）それぞれに生じたものである可能性を補強する根拠になると考える。

上野(2006)は、祖体系の核を、昇り核⁶（上げ核ではない）と下降核の組み合わせとみる。これは、I-4/5 類、II-6/7 類といった去声はじまりのアクセント型を語頭核とみるからであろう。上げ核体系と解釈する(1)では、核による語頭の上昇は認めないので、去声はじまりの型は無核型とみなす。アクセント核のない型はそれぞれ語声調的な体系であり、名義抄体系では無核型に二つの語声調があったが、鎌倉時代の四座講式以降の京都の体系では高平調一つに統合したと考える。語頭音節内の上昇調をもつ語声調が、ピッチ・アクセント体系が成立する前の体系の残存であるとする分析については 3 節で述べる。

木部(2008)は、上げ核の位置が外輪体系の核の位置によく一致することに着目して、これらの体系が下げ核を失った上で、残った上げ核が、大分方言においては下げ核へ、青森方言においては昇り核へ、それぞれ核自体が変化したという説を述べている。大分方言に関しての変化の過程としては、上げ核の下降調化を想定しているので、この下降調が降り核の実現形の一つであるともみれば、降り核を経ての下げ核化とみることができるが、この降り核化は、外輪だけでなく中央・内輪・中輪に共通の変化である可能性もある。まず、降り核化を経なかった東北地方独自の変化である可能性のある青森方言の昇り核化の過程に関する説を検討し、この昇り核化が東北地方の外輪諸体系に共通の変化であるとする根

⁶ 昇り核体系とみなす場合、I-3, II-3, III-4 といった、語末モーラまで低い型は無核とみなすことになる。語末モーラに次音節を上げる核を認めると、n モーラ語に n+1 種類の対立があることになり、アクセントをモーラに置く「核」説ではなくなる。

抛を述べる。

2.1. 上げ核の昇り核化

上げ核と昇り核は共に上昇核であり、上げ核の昇り核化とは上昇開始の早めという、通常は「自然な音調変化」とはみなされない変化である。青森方言について木部(2008)が想定している上昇開始の早めは2種類ある。

(2) 青森方言の上昇の早め

- a. 上げ核の上昇の発現すべき音節の母音が狭い場合
- b. 語末の上げ核

(2)a の完結が先行するとみられ、(2)b では、語末音節の母音の広狭にかかわらずこの位置に昇り核が発生する。(2)a を、木部(2008: 70)では「核が一つ前の音節にずれた」としているが、ずれたのは上昇開始位置であって、核の位置自体は変わらない。むしろ、この上昇開始の早めによって、上げ核体系では存在しないはずの語頭音節の H が出現したため、昇り核と解釈されるようになったとみるべきであろう。上げ核の上昇の発現すべき音節の母音が広い場合は音調の上では変化がなかったが、核の種類が上げ核から昇り核に変わったために核の位置がひとつ後ろにずれた、ということになる。一方、次末音節に上げ核があり、語末音節の母音が狭くない場合も、上昇開始位置の変化はなく、(2)b によって上昇が早められた語末核と合流したと考えられる。

(2)a のタイプの弱いモーラの位置への上昇が早められることは、東京方言の句音調の実現で観察されるように、音調変化としては不自然なものとはいえない。また、(2)b のように上げ核体系の語末音節に上昇調が出現しやすいのは、下げ核体系の語末核型で下降調が現れる場合があるのと対称的な関係にあると考える。

青森方言に限らず、東北地方の昇り核方言には、多音節語語頭核に制約があるものが多い。平山輝男(1957)が特殊音調Ⅱと呼んだ岩手県南部から宮城県北部の体系では、語頭核が現れるのが、第2モーラが有声の特殊拍(長母音・二重母音)である場合に限られる。これは、(2)a のヴァリエーションとして説明できると考えられる。一方、柴田(1955)や上野(1975)で分析されている鶴岡市方言では、語末核型の2拍名詞と3拍名詞に付属語が接続する場合に、昇り核体系では本来ありえないはずの付属語側の上昇があり、無核型との弁別が維持される。これは、助詞が接続する場合に(2)b の上昇の早めが起きなかったために、付属語の接続した形でのみ、名詞が付属語と一つのアクセント素として融合し、助詞側に昇り核を置く、というような変化が生じていると分析することができる。

これに対して、上野(1989, 1992), Uwano(2012)では、昇り核を下げ核から高核を経て発生

したとする立場をとる。高核を経ての方向性の逆転自体は双方向的であると考えられるので、昇り核から下げ核ではなく下げ核から昇り核の変化であることを論証する必要があるが、上野(1989, 1992)の次の二つの論点は必ずしも説得力があるとはいえない。

A: 雫石方言では句末の音調形や、次末文節の焦点形として、核の後ろで下げ核と同様の下降のある形が現れ、古い音形の残存とみることができる。

B: 雫石方言で有核の非句末文節に次文節の文節頭の(昇り)核が接続するとき、上昇せずに平進(ただし、無核の連続のそれとは弁別可能)となるのは、本来、非句末文節での核に続いていたLが文節末まで実現しなくなる変化のなごりである。

Aのイントネーション形は、古い音形の残存であるかどうかとは無関係に、共時的には昇り核体系で許容される(先行する上昇を損なわない)音調形であるといえ、先行段階で下げ核であった決め手にはならない。Uwano(2012)で記述される、東京方言の句頭イントネーションと対称的な弘前方言の句末イントネーションは、共通の昇り核をもつ体系がイントネーションではより大きく変異しうることを示しており、いずれかの方言で核の先行段階がイントネーションとして残っているということは期待できないと思われる。

Bは、たとえば(3)の祖形として(3)aを想定していると考えられるが、(3)bのような上げ核をもつ祖形からも同じ結論が導かれる。

(3) [テ*ト][サ*ルト][カ*プトト][コ*]スモス (“|” は文節境界)

a. テ*ト|サ*ルト|カ*プトト|コ*]スモス

b. テ*[ト]サ*[ルト]カ*[プトト]コ*[スモス

より重要な点は、上野(1989)が雫石方言の体系の重要な特徴としている「文節関与性」、つまり、昇り核の後のHが続くことができるのが文節末までである、ということが何に由来するかである。(1)の祖体系で無核型に設定したH, HH, HHHに代わってL, LL, LLLを立てれば、雫石方言は「段階」として語頭のLを祖体系から引き継いでおり、このLは名義抄体系のLと同様に、上げ核(および昇り核)の性質には還元できないメロディー上の性質であると考えることができる。無核型の「段階」として(1)のHと(4)のLのどちらが祖形でありどちらが改新であるかは、「上昇がない」という無核型の特徴からは決定することができないが、境界下降の有無による対立があるかないかと相関しているようには見える。

(4) 東北外輪祖体系

I -1 L	II -1+ LL	III -1+ LLL
I -2 L	II -2 LL	III -2 LLL
		III -4 LL[H*]

	II-3	L[H*]	III-5a	L[H*H~LL[H*]	
			III-5b	L[H*H~LL[H*]	
I-3	[H*]	II-4	[H*H~L[H*]	III-6	[H*HH~L[H*H]
		II-5	[H*H~L[H*]	III-7+	[H*HH~L[H*H]

2.2. 上げ核の降り核化

1節で述べたII-3類の有核化は、III-4/5類とも共通してLLの連続がHに先行する場合に起きた「連低類の高起化」とまとめられる、中央・内輪・中輪をはじめ多くの体系が経たとみられる変化である。この変化を、(1)の上げ核L*[が降り核]L*に変わる変化とみれば、やはり核の位置の変わらない核種変更の変化とみることができる。

しかし、祖体系に下げ核があったとみる木部(2008)は、この変化を新たな下げ核の発生とみており、同じ位置での核種変更としては取り扱っていない。現代京都・東京への変化の記述全体が、ほぼ通説に従うものであり、東京方言II-4/5類、III-7類の語頭下げ核の発生も、連低類の高起化後に残った語頭下げ核の一拍ずれを経て、連低類の高起化と同様なプロセスでの語頭下げ核発生とみており、これを京都方言での上げ核消失に対置させている。一方、先に述べたように上野(1975)は、連低類の高起化に先行する段階(四座講式)として、この位置に降り核を想定しているが、さらにそれに先行する段階(名義抄)は、補注3で、語頭去声を有核とみる昇り核体系としているため、核の位置は異なっている。下げ核からの昇り核発生に結び付けられる「高核([T])」の議論で、「低核([T])」の存在可能性に言及してはいるものの、「存在する蓋然性はかなり小さいのではないかと思う」と述べており、核種変更の可能性は否定していると思われる。上野(1975)での降り核の位置付けは、京阪方言の低起式を核に還元することに主眼があったようで、「全てを『核』で説明しようとする立場を放棄(上野 1989: 202)」した後は、降り核への言及はない。

しかし、祖体系に下げ核を認めない児玉(2014)の立場では、上げ核の降り核化が中央・内輪・中輪の改新としての下降境界特徴からの核の発生に直接に結び付けられる。(5)で]L&で示したII-2、III-2、III-7各類の語末モーラのLは、この段階で核になったと考えるのである。

(5) 降り核化と新たな核の発生

I-1	H	II-1+	HH	III-1+	HHH
I-2	H]	II-2	H]L&	III-2	HH]L&
				III-4	LL]L*
		II-3	L]L*	III-5a	L]L*H

		III-5b	L]L*H]
I-3]L*[II-4]L*H
		III-6]L*HH
		II-5]L*H]
		III-7+]L*H]L&

注意が必要なのは、無核型に H という L と区別される段階を設定しているのは、あくまで名義抄体系の説明とするためであるという点である。(4)の東北外輪祖体系で設定した L のほうが祖体系であり、無核型が H となったのは中央諸体系の改新であった可能性もある。もしもこの祖形が L であれば、]L*に後続する H への上昇は弁別性がないため、(5)の段階で L と H の区別を失い、核だけで下降が説明される東京式に近いが上昇開始の早い体系が成立していた可能性もある。この体系では、二回の下降をもつ場合には最初の下降のみが核として残ったと考える。

(5)' 降り核化による一元体系化 (JT*が下降調 F で実現?)

I-1	T	II-1+	TT	III-1+	TTT
I-2	T(j)	II-2	T]T*	III-2	TT]T*
				III-4	TT]T*
		II-3	T]T*	III-5a	T]T*T
				III-5b	T]T*T(j)
I-3]T*	II-4]T*T	III-6]T*TT
		II-5]T*T(j)	III-7+]T*T(j)T

無核型は本質的には語声調である、という立場では、この型は、有核型との対立が維持できれば、高平・低平・下降あるいは「くぼみ」のいずれの音調をも取りえたであろうと考える。そうであれば、上昇核の有核型から下降核の有核型への変化は、おそらく下降式の無核型をもっていた体系にもっとも大きな影響を与えたと考えられる。

降り核が具体的にどんな音調で実現していたかは、実在する現在の諸体系に例がない以上、他の核から類推するしかない。たとえば、語末下げ核の実現が方言ごとに、あるいは環境によって高平であったり下降調であったりするのと同様に、語頭降り核の実現も、方言ごとに、あるいは環境によって、低平であったり下降調であったりしたのではないかとされる。平子達也(2015)は能登島方言の一部に見られる II-4/5 類の語頭に下降調をもつ式を、通説の語頭隆起による核の発生の過程を示すものと分析している⁷が、本来の語頭降

⁷ 平子(2015)は、「雨」のような II-5 類での第 1 音節の長母音化が連低化による語頭隆起の原因だと分析しているが、1 モーラに下降調を実現するために母音の延伸が起きた、という解釈も可能だと思われる。

り核の実現形の痕跡をとどめるものという解釈も可能である。また、服部(1951 新説)が仮定している下降調は、Ⅲ-5a/b を除き(5)の2モーラ・3モーラの名詞の降り核と位置が一致している。降り核による下降の開始が下降調からさらに遅れれば、下降が主に次音節側で実現するものとして、降り核が同じ下降核である下げ核に変わることになる。

一方、降り核の下降の開始が遅れず、常に低平調で実現する体系では、音調が変わらないまま、この下降をひとつ前のモーラの下げ核の実現と解釈するという改新もありえたと考えられる。上野(1975)は、四座講式体系から室町時代の補忘記体系への京都での変化として、降り核からひとつ前のモーラの下げ核への変化を仮定している。この場合、降り核体系の有核ではありえない語末音節の H] が語末下げ核として核に組み込まれるが、このような体系では1音節語(I-2類)や低起の2音節語(Ⅱ-5類)を除くと、語末核にアキマが生じる。一方、語頭降り核の下降開始が、この低平調をはじめ、下げ核と認められるほどじゅうぶんに遅れなかった体系では、下げ核に一元化された体系においては語頭核が核としての性質を失うことになる。(1)の祖体系で有核であったと仮定したⅠ-3、Ⅱ-4、Ⅲ-6各類とこれに合流したⅡ-5類などが無核となる体系は、このような核の位置の前へのずれを含む核種変更の改新によって無核化を説明できる。中央式のようにHとLの段階のある体系では、新たな下げ核までの平進部がHと合流するのに対して、語頭の降り核は低起性(L)のみを残し、上昇式として、Hに由来する平進式との新たな式対立を生じる。この式対立がなんらかの理由で生じなかった場合には垂井式の1種類の無核型をもつ体系となる。

(6) 中央式の核の一拍前ずれを伴う下げ核化

I-1 H	Ⅱ-1+ HH	Ⅲ-1+ HHH
I-2 H*]	Ⅱ-2 H*]L	Ⅲ-2 HH*]L
		Ⅲ-4 HH*]L
	Ⅱ-3 H*]L	Ⅲ-5a H*]LL
		Ⅲ-5b H*]LL
I-3 L	Ⅱ-4 LH	Ⅲ-6 LHH
	Ⅱ-5 LH*]	Ⅲ-7+ LH*]L

一方、Ⅰ-3、Ⅱ-4/5、Ⅲ-7類が有核でⅢ-6類のみが無核となる中輪・内輪の体系は、語頭核の説明がむずかしい。Ⅰ-3、Ⅱ-4/5、Ⅲ-7類の下げ核が、降り核から直接派生したとみなすとすれば、Ⅲ-6類では音節構造上、語頭音節に下降調が実現できるほどの長さが確保できず、下げ核の発生に至らなかった、というような、環境の要因による説明が必要になる。一方、木部(2008)が採用するような、Ⅰ-3、Ⅱ-4/5、Ⅲ-7類の有核化が、中央諸体系

と同様な連低類の高起化と語頭核の無核化を一旦経て、核の一拍ずれの完了後に再び起きたものだとする通説の説明もじゅうぶんに説得力がある。木部(2008)が、大分の外輪式にのみ、上げ核から直接の核種変化（降り核的な下降の遅延を経た下げ核化）による説明を与えているのは、この体系がⅢ-6類を含めて語頭核の例外が少ないことも理由として考えられる。

本来の降り核が下降遅延により下げ核化した語頭核と、無核化を経て語頭隆起によって再び有核化した語頭核との大きな違いは、後者の有核化が核の一拍後ずれ完了より前には遡らない比較的最近の改新だということである⁸。垂井式のように、中央式の周辺にこの有核化が起きている体系と起きていない体系が混在していることは、この反映である可能性がある。これに対して、中央式の地域から遠くなると、特に東日本側についてはこのようなブレが生じていないように思われる。

もう一つ、無核化を経た再有核化の根拠となる可能性があるのが、内輪では有核、中輪では無核となり二つの類型を分ける特徴となっているⅠ-2類である。核の前ずれ仮説によれば、祖形で上げ核をもたないこの型が有核となるのはⅡ-5類と並んで、核の位置の前方移動を伴う形で降り核の下げ核化が起きた場合である。降り核の体系ではHを語末モーラにもつ有核型はありえないが、語末モーラがHで後続の語が低ければ語末核と認められる。降り核の段階で境界下降の有無が失われていれば、Ⅰ-2類はⅠ-1類と合流するはずである。Ⅰ-2類がⅠ-1類と合流しないのは、内輪のほか、垂井・能登・加賀・讃岐といった、中央式に近く、中央式と共通の改新を経たとみなすことに無理がない地域に限られている。

これらの点を考慮すると、Ⅰ-2類がⅠ-1類と合流しない中輪諸体系の、少なくとも一部には、中央式と共通の一拍前ずれの変化を経たのではなく、(5)'のような降り核体系から下降の遅延により降り核が語頭核を含めその位置で下げ核化したものを含んでいる可能性が高いと考える。

2.3. 降り核化を経た無核化と語声調化

Ⅱ-4/5類の無核化については、核の1拍前ずれ仮説による語頭核の式への転換として説明したが、讃岐を中心としてみられるⅡ-3類(及びⅢ-4類)の無核化についての検討が必要である。これらの体系は、Ⅱ-4類(及びⅢ-6類)でも無核化が起きており、二つの無核型が「式」によって区別される語声調的な体系である。Ⅱ-2、Ⅲ-2、Ⅲ-7(およびⅡ-5)の各類は有核となっているので、降り核化が中央・内輪・外輪の諸体系でこれらの類を有核化し

⁸ 降り核が語頭・語中を問わず、音声的には[$L^* > (*)F > H^*$]のような変化を経たとすれば、語中の核の一拍ずれと、無核化後の語頭モーラ再有核化の時間的ずれはないことになる。

た、という仮説によれば、讃岐の諸体系も降り核化を経ていると考えなければならない。ところが、(5)にJL*で示した本来の上げ核に由来する降り核JL*が、新たに加わったJL&と合流せずに、核ではなくなってしまう。この説明としては、この変化が、JL*の下降がLの段階（低起）から開始されているためJL&と比べて下降の幅が小さく、下降式的な音調をとっていた本来の無核型と似ていた段階で起きた、という説明も可能だが、下降の幅のほかに、JL*の降り核としての下降のタイミングの問題も考えられる。Ⅱ-4類(及びⅢ-6類)の無核化から、讃岐諸体系でも下げ核化は中央式と同様の核の一拍前ずれを伴ったと考えるが、語中の降り核JL*の下降はもはや先行モーラの下げ核の実現形とはみなせない程度まで遅延が進んで下降調化したものの、降り核のその位置での下げ核化とみなせるほどには遅延しておらず、核としての性格を失い下降式の無核型と合流した、というものである。これは、下降核としての降り核と下げ核の間の連続性と、下降式的な無核型の組み合わせが無核化を条件付ける、とする仮説である。

以上のような讃岐の過程が、有核型の上げ核が降り核化した結果、下降式の無核型と同化して無核化したと仮定されるのに対し、加賀や隠岐3型は、下降式の無核型(Ⅱ-1, Ⅲ-1)が降り核化を経た有核型に同化して、有核化する変化を経ていると考えられる。有核型が降り核化を経たと考えるのは、これらの体系でもⅡ-2/3類とⅢ-2/4類が統合しているからである。両体系は、Ⅱ-4類が無核化している点でも似ている。この無核化は、おそらく中央式と同様に、核の一拍前ずれによる下げ核化を経ているものと考えられるが、隠岐3型でなぜⅡ-5類やⅢ-7類が無核になるのか、あるいはⅠ-2類がなぜⅠ-1類と合流しているのかは、中央式と共通の変化で説明することはできない。

隠岐3型の場合、3型の祖形が（1拍前ずれの下げ核化を経て）語頭核になる型(Ⅱ-2/3, Ⅲ-5)、語頭核でない有核型(Ⅱ-1, Ⅲ-1/2/4)、無核型(Ⅰ-3, Ⅱ-4/5, Ⅲ-6/7)の分割となる。Ⅰ-1/2類は、付属語の接続した文節形が有核型の同じ長さの名詞と同じになる系列性を示す。有核型の下げ核の位置対立が語頭対非語頭の二項対立に還元されている形である。本来の(下降式の)無核型が非語頭の有核型と合流していることは、語頭核以外の下げ核の下降曲線が讃岐の場合と同様、下降式無核型と似ていたことを示すと思われる。3型化した結果、有核型は二種類の下降型語声調として無核型の上昇調語声調と対立する体系になり、さらに隠岐の諸方言でさまざまなメロディー対立の体系に変化した。(児玉 2015)

加賀に隣接する福井の3型でも、松倉昂平(2014)が記述する型の分割は隠岐とよく似ている。違いは、Ⅰ-2類が語頭核型になる点であり、この点は加賀など中央周辺地域と共通である。このように、隠岐3型や福井3型は、多型アクセント体系からN型アクセント(児

玉 2015 では語声調) が発生している例である。また、Ⅰ-2、Ⅱ-2/5、Ⅲ-2/7 の各類だけが有核となる讃岐諸体系と同様の変化が、外輪諸体系のように高結式と低結式の区別を失いⅠ-2、Ⅱ-2/5、Ⅲ-2/7 の各類が無核となってⅠ-1、Ⅱ-1/4、Ⅲ-1/6 と統合している体系に生じたとすれば、やはり有核型をもたない語声調体系になっていたと考えられる。

2.4. ピッチ・アクセント体系の波状的分化

以上、音調の点では名義抄式に近い上げ核体系を祖体系として、本土方言の多型アクセント体系と本州側の N 型アクセント体系を、以下の 3 種類の核種変更の変化によって説明した。

- [1] 昇り核化とこれに伴う核の後ずれ 東北外輪
- [2] 降り核化を経た下げ核化 九州外輪、中輪？
- [3] 降り核化と降り核の下げ核解釈による核の前ずれ

中央、垂井、讃岐、内輪、加賀(福井 3 型)／隠岐 3 型

[3]は通説にいう「連低類の高起化」であり、通説でこれを経た後にさらに核の後ずれと語頭隆起が続いたとされる外輪・中輪・内輪の諸体系に対し、これによらない説明もできることを示し、中央式と同じ[3]の変化の及んだ範囲を通説より限定することを試みた。木部(2008)との違いは、中輪を[3]ではなく[2]の側に組み込んだことであるが、その根拠はⅠ-2 類の有核化の有無だけであり、この解釈をとる場合には中輪のⅢ-6 類の無核化の説明が必要になる。また、出雲の外輪は、語頭核の現われる類とその音節構造が限定されている点や、Ⅱ-3/4 類の合流が見られる点で東北外輪と似ており、「昇り核化を経た下げ核化」の可能性もあると思われるが、無核型で高結・低結が統合しているのに対して有核型ではⅡ-4/5 の区別が部分的に維持されていることなど、さらに説明を要する問題が多い。

[1]の昇り核化と[2]と[3]が共通に経たと考えられる降り核化は、ともに地理的に連続して分布しており、波状的に広がった変化であると考えられる。境界特徴による低結式語末音節を欠きこの音節の降り核化が起きた形跡(Ⅱ-2/3 類とⅢ-2/4 類の統合)のない九州外輪も[2]を経たと考えるのは、降り核化は無核型側の変化の有無にかかわらず、下げ核をもつ有核型に生じうる変化であり、系統分化を経た体系にも波状的に伝播しうるものとみるからである。また、無核型が下降式となった体系であれ、高平式となった体系であれ、有核型は降り核化を経ることができたはずである。

昇り核化と降り核化をともに生じうる体系であり、かつ名義抄に記録された音形を説明できるものとして、(1)の祖体系を再建した。この再建では、どの類が無核になるかの点でよく似ている外輪（および中輪？）の体系が祖体系のアクセント核の位置を保存し、核の

一拍前ずれと低起無核の発生という中央式を中心とする改新が周圈的な分布を作ったというアクセント変化を想定するものである。核の種類の変化の回数はそれぞれ1回、核の位置の移動は、中央で1回、内輪で前にずれてまた戻るという2回であり、核の位置の変化を種類の変化と同程度に起こりにくい変化とみなすことになる。

(1)は、名義抄体系の音調を参照しているが、名義抄の音調が祖形に近いとするバイアスが次の3点に現れている。

- [1] H と L の段階がある。
- [2] 低結式の下降の開始位置が固定している。
- [3] 無核型に平進の語声調を設定している。

これらのバイアスを取り除いたものが(7)である。高結式と低結式の対立を"="と"^"で示し、"^"の下降開始位置は（位置の固定する下げ核と異なり）上げ核の実現を妨げない範囲で可変的であったとみる。無核型 X, XX, XXX は、上昇調を除く任意の語声調（平進、下降、くぼみ）でありえたと考える。

(7) 上げ核体系としてのピッチ・アクセント祖体系

I -1 X=	II -1+ XX=	III -1+ XXX=
I -2 X^	II -2 XX^	III -2 XXX^
		III -4 TTT*[
	II -3 TT*[III -5a TT*[T=
		III -5b TT*[T^
I -3 T*[II -4 T*[T=	III -6 T*[TT=
	II -5 T*[T^	III -7+ T*[TT^
I -4 R=	II -6 RH=	III -8 RHH=
I -5 R^	II -7 RH^	

最後に、1節でまとめた2音節名詞各類の変化を簡単にまとめる。祖体系ではII-1/2類が無核、II-3/4/5類が有核である。

II-1類の有核化：下降式からの下げ核発生

II-2類の有核化：降り核化に伴い境界特徴が核となる

II-3類の無核化：無核型が下降式の場合の降り核下降の下降式化

II-4類の無核化：1拍前ずれによる降り核の下げ核化に伴い語頭核が消失

II-5類の無核化：未詳（隠岐・福井3型）。降り核化に先行するII-4/5類統合？

3. 改新としてのピッチ・アクセント化

児玉(2014)は、(7)の境界下降が本来核ではなかったとする立場に立ち、これが有核化しなかった九州の諸体系について、下げ核によるピッチ・アクセントの発生があったかどうかを検討した。通説に従えば「連低類の高起化」とその核の後ろへの移動に続く語頭隆起のみが下げ核の発生として可能な変化であることから、豊前式（本稿の九州外輪）と、語頭隆起を経た筑前式のほかの体系（対馬主流式、2型、1型）は、ピッチ・アクセントが発生せず、祖体系がもっていた語声調的性質を引き継いだとする仮説を展開した。

(8) 児玉(2014)の語声調祖体系

I -1 H=	II -1+ HH=	III -1+ HHH=	第1類連体形・連用名詞化形
I -2 H^	II -2 HH^	III -2 HHH^	第1類非連体形
I -3 L[II -3 LL[III -4 LLL[第2類連用名詞化形
(I -4 R=	II -4 LH=)	III -5a LLH=	第2類連体形
(I -5 R^	II -5 LH^)	III -5b LLH^	第2類非連体形
I -4 R=	II -4 LH=	III -6 LHH=	
I -5 R^	II -5 LH^	III -7+ LHH^	

祖体系を語声調とみるのは、おもに「系列」性に拠っている。上野(1984)がN型アクセントの重要な特徴として提案した文節アクセント的性質（付属語のアクセント喪失）と重なる現象を上野(2012)では「系列化」と呼ぶが、ここでは「系列」をより幅広く、音節数の異なるアクセント型が、単に音節数ごとに同数の型を区別するだけでなく、音節数の異なる型のそれぞれの間に系列的な対応関係が見いだされる、というように解釈した上で、名義抄体系の系列を、屋名池誠(2004)を参考に、動詞の活用形の音節数が異なる場合のアクセント型から推論し、祖体系に遡るとした。この推論では、(7)の各行が同一の語声調をもつ系列であると考え、それぞれ高平調、低平調、上昇調のメロディーと、境界特徴の組み合わせから成ると分析する。ただし、上昇調については、3音節で2種類の対立があるのに対し、1・2音節ではこの対立が中和すると考える。

「連低類の高起化」を経た体系では、語の長さに応じてこれが適用される場合とされない場合がある動詞第2類を中心に、こちらの系列性が崩れる。たとえば、隠岐3型では同じ動詞の活用形がA,B,Cの異なる語声調（あるいは系列化したN型アクセント）に対応する場合がある。しかし、九州2型では動詞・形容詞の系列性が維持されており、1型化する筑前式・対馬主流式とともに、この点を「連低類の高起化」を経ておらず、有核化が起きていないとみる根拠とした。

児玉(2014)では、下げ核のみを核とみて、上昇をメロディーの一部とする分析となつて

いる。しかし、ピッチ・アクセント祖体系を上げ核体系とみる場合、この上げ核体系と九州諸体系の間の関係を見直す必要がある。前節でみたように、上げ核が降り核化した体系からも語声調体系が発生することは可能であり、九州外輪だけでなく、2型や1型の現在は核をもっていない九州諸方言も、祖体系において上げ核の有核型であった可能性がある。2型アクセントの場合、下降式に由来する無核型に対して、有核型が木部(2008,2010)で仮定するように、上げ核の位置対立を失ってすべて統合して上昇型となった、と解釈することになる。

これに対して、祖体系がやはりピッチ・アクセントではなく語声調体系であるとする場合、どのような変化で上げ核が成立したのかを説明しなければならない。祖体系の型が統合する改新を経ただけの九州諸方言からこれを説明するのは不可能である。しかし、琉球諸方言の体系と名義抄体系で問題にされてきた類の対応のズレが琉球方言側の改新によるのではなく日琉祖体系まで遡るものとして分析すれば、上げ核のピッチ・アクセント祖体系が経た変化が明らかになる。

3.1. II-4/5 類の日琉分裂対応の語声調祖体系による説明

琉球方言全域にわたる 25 地点で、1・2 拍名詞の類別語彙がどのようなアクセント型で実現するかを概観したのが上村幸雄(1959)である。この結論では、これらのすべての地点で II-1/2 類と II-4/5 類の区別の痕跡がないという九州諸方言と共通の特徴を指摘した上で、II-4/5 類が各方言で複雑な対応をみせることを、次のようにまとめている。

(9) A) II-3 類と同様の対応となる「雨」「汗」のような語がある。

B) 第 1 音節が長音化する場合としない場合がある。

B1) 沖縄本島南部は長音化傾向が強く、国頭（北部）で少ない

B2) 長音化しない場合に対応がさまざまな様相でずれる場合がある。

服部四郎(1959)は、北琉球方言の方言間比較により、1 音節語に a, b の 2 類、2 音節語に A, B, C の 3 類を立て、この諸方言のアクセント型が、Aa, Bb, C の 3 つの類とその統合でほぼ説明できることを初めて示した。B と C は、共に類別語彙の II-3、II-4、II-5 の各類の対応語彙を含む。さらに、C に分類される語の多くが首里方言で第 1 音節に長母音を持ち、C が他の類と統合しない方言ではこれに対応してすべて第 1 音節にアクセントをもつことから、祖語の長母音からこの位置のアクセントが発生したと分析した。

一方、金田一(1960)や平山輝男・中本正智(1964)は、II-4/5 類の琉球諸方言の祖形として、大分方言と同じく第 1 音節にアクセントをもつ型を立て、アクセントから一部の語で長母音が発生したとする説を提案した。これは、(9)B の第 1 音節長母音の分布の方言によ

るばらつきを考慮したものであろう。しかし、長母音をもつかどうかに関わらず、大分方言で語頭核をもつⅡ-4/5類が琉球方言のB類とC類に二分されることを無視している。

これに対し、服部(1979a)はⅡ-4類とⅡ-5類の分裂を北琉球諸方言データの対応により示した。C類に対応するのがⅡ-4(1)類とⅡ-5(1)類、B類に対応するのがⅡ-4(2)類とⅡ-5(2)類であり、前者の多くに首里方言の第1音節に長母音が現れる。このことから、琉球祖体系側の改新として第1音節の母音の長短に条件付けられた型の分裂を想定しない限り、日本祖語においてⅡ-4類とⅡ-5類に相当する4つの類を立てなければならなくなることを指摘した。

しかし、Ⅱ-4類とⅡ-5類に代えてⅡ-4(1)、Ⅱ-5(1)、Ⅱ-4(2)、Ⅱ-5(2)の4類を立て、祖体系の2音節名詞に、3音節名詞と同数の、7つの型を認める分析は、祖体系が系列性をもつ語声調体系であったとする仮説にとっては、むしろ望ましいものとなる。(8)で3音節の語形にのみ認めた2種類の上昇調メロディーの対立が、2音節の語形でもあったと想定できるからである。つまり、この祖体系から(7)のピッチ・アクセント祖体系への仮定される変化は、2音節語形での上昇調メロディー対立の中和であるということになる。

(10) 日琉祖体系（語声調）

I -1 X=	Ⅱ -1+	XX=	Ⅲ -1+	XXX=	琉球 A：第1類連体形・連用名詞化形
I -2 X^	Ⅱ -2	XX^	Ⅲ -2	XXX^	琉球 A：第1類非連体形
I -3 L[Ⅱ -3	LL[Ⅲ -4	LLL[琉球 B：第2類連用名詞化形
I -4 R=	Ⅱ -4(2)	LH=	Ⅲ -5a	LLH=	琉球 B：第2類連体形
I -5 R^	Ⅱ -5(2)	LH^	Ⅲ -5b	LLH^	琉球 B：第2類非連体形
	Ⅱ -4(1)	RH=	Ⅲ -6	LHH=	琉球 C
	Ⅱ -5(1)	RH^	Ⅲ -7+	LHH^	琉球 C

Ⅱ-4(1)、Ⅱ-5(1)各類の上昇の早い型のメロディー祖形としてRHを立てるのは、名義抄体系と首里方言の両方に拠っている⁹。(1)で無核のまま残存したと分析した第1音節に去声をもつ2音節語のうち、琉球方言に対応語をもつのはⅡ-6類の「胡麻」「蛇」「百合」、Ⅱ-7類の「脛」の4語であるが、このうち「百合」を除く3語が琉球諸方言ではC類となる。この一致が有意であるとすれば、これらの語は、Ⅱ-4(1)、Ⅱ-5(1)各類がⅡ-4(2)、Ⅱ-5(2)各類との合流に際し、何らかの理由で曲調音節が残った残存形ということになる。

⁹ ウェイン・ローレンス(2009)は北琉球祖体系として2音節C類(「系列」の用語を用いる)の第1音節に上昇調長母音を再建しているが、この再建仮説はC系列の最後の2拍が高いとしており、北琉球祖体系に「拍」を認め、長母音を2拍とする点で、拙論とは異なる。

- (11) a. 「胡麻」 沖永良部正名 (松森 2000) guma 与那国 (上野 2013) guma] 今帰仁
 ?iguu[ma 首里 ?uguma cf. 鹿児島 go[ma (B)
- b. 「足 (<脛)」 沖永良部正名 hagi 沖永良部国頭 Fazji 与那国 paN]
- c. 「蛇」 首里 hwiibu, 指小辞形 hwiibaa cf. 鹿児島 he[bi (B)
- d. 「百合」 首里 jui 与那国 duju_ 鹿児島 ju]ri (A)

一方、服部(1979)の次の連載では、首里方言の長母音が日本祖語に遡る可能性を論じているが、その意図とはうらはらに、首里方言 2 音節名詞の長母音の分布がアクセント型の C 類に圧倒的な偏りがあることは明らかであり、また、単独では長母音をもつ語が構成する複合語では長母音化がないことも、この長母音が 2 音節語のアクセント型の実現と関係することを示している。一方、服部(1979)で II-4(1)、II-5(1)として挙げられている語例や連載次号に掲載の II-3 類のうちアクセントが C 類となる 5 語には、以下のような首里方言で第 1 音節に長母音を含まないものを含んでいる。

- (12) a. 短母音のみ 「蚤」「浜」「骨」(以上 II-3 類); 「海」「筋」「船」「露」
- b. 短母音を併記 「宿」「猿」
- c. 『沖縄語辞典』に短母音形 kubu 「蜘蛛」

これらの共通点は、いずれも第 2 音節の冒頭子音が有声であり(有声障害音が前鼻音化を伴っていたとすれば)母音を長母音化しなくても子音の延長によって有声部を伸ばすことにより上昇調を実現しうる環境をもつ、という点である。

また、『沖縄語辞典』では、標準語の語頭の i,u が「マ・ナ・バ・ダ・ガ」の各行に先立つ場合に対応して、首里方言の ?N が現れ、語頭の mi, mu に対応して N が現れるとしているが、C 系列の「海」や「婿」はこの例外となっている。

- (13) a. 「梅」 首里方言 ?Nmi (1 型) 今帰仁方言 ?u[mii (A 類)
- b. 「濃み」 首里方言 ?Nmi (0 型) 今帰仁方言 ?umi[i (B 類)
- c. 「海」 首里方言 ?umi (0 型) 今帰仁方言 [?u]mi (C 類)

有声部の延長が可能なら必ずしも長母音化せず、逆に短縮が阻まれもする首里方言 C 類の特徴は、C 類 2 音節語の第 1 音節に曲調音節があり、曲調の実現のために第 1 音節が平調音節より長めに発音されたとして説明できそうなものが多い。その場合、首里方言の長母音は、このような本来は音声的な特徴が、曲調が失われた後に音韻論的な長さの対立として残存したものとして説明することになる。

さらにこの説明は、上村(1959)が長母音化が少ないとする沖縄本島北部諸方言との比較からも裏付けられる。(13)の今帰仁方言は C 類の第 1 音節が短く、かつ C 類が HL の音調

となる体系であるが、沖縄言語研究センターの138地点の全集落調査に基づく『やんばる言語地図』(名護市教育委員会市史編纂委員会 2006)を参照すると、C類がHLではなくLHになる地域¹⁰を含め、本部半島の基部側の今帰仁村・名護市羽地地区・名護地区では、(13)の例のように、2音節語のA類とB類の第2音節側のみに長母音が記録されている地点が多い。B類第2音節はこの地域全域で上昇調であり、A類第2音節は、名護市羽地地区を中心に下降調の地点が多く、これらの長母音も曲調音節に結び付けられる。この地域でC類2音節語の第1音節に長母音が現れないのは、B類とC類の声調対立が第1音節ではなく第2音節側の曲調に移ったためであるという解釈も可能であろう。つまり、沖縄本島における一見ランダムに見える長母音の分布は、曲調実現のための母音の音声的延伸が、アクセントの変化によって位置を変えた結果として分析できる可能性があるのである。

3.2. 改新としての上げ核化

(10)を日琉祖体系と認めた場合、(7)の上げ核の位置対立をもつピッチ・アクセント祖体系への変化は、2音節語の2種類の上昇調の弁別の喪失と、上げ核の位置対立の発生、ということになる。この2つを結び付けるのが、現代日本語の音韻構造を特徴付ける「拍の等時性」、つまり、2モーラ音節(長母音開音節や閉音節)は2拍、1モーラ音節(短母音開音節)は1拍という、モーラ配列上のタイミングに関する制約の確立ではないかと考える。一般に、音節内での曲調の実現には、平調の場合よりは時間的に長い有声部が必要である。日琉祖体系のII-4(1)・II-5(1)類とII-4(2)・II-5(2)類のように、平調音節と曲調音節が対立する体系では、「拍の等時性」が確立されていなければ、曲調側の音節を長めに発音することで弁別を容易にできる。しかし、「拍の等時性」の確立とともに、アクセントの要求に答えるための音節長を変更することができなくなり、この弁別の維持は困難になったと考える。

日琉祖体系では2音節語で(語末上昇を含め)3種類あった上昇の弁別が、音節数と同数となり、どの音節の後で上昇するか、という音節ごとの位置対立のみになったのが上げ核体系である、とみれば、II-4(1)・II-4(2)類、II-5(1)・II-5(2)類の統合は、ピッチ・アクセント発生に直接結びつくともてよい。なお、失われたとみるのは曲調モーラと平調モーラの対立であって、たとえば降り核の実現として下降調が現れうるというような、環境に応じた異音的変異としての曲調を否定するものではない。

これに類似する現象は、鹿児島方言を母語とする筆者の内省でも観察できる。鹿児島方

¹⁰ やんばる地域のうち名護市羽地地区以南では2音節C類はLHが支配的である。

言には、語形を共通語化してアクセントだけを2型アクセントで残す共通語化形（「からいも普通語」と呼ばれることがある）がある。(14)aと(15)aのペアは共に、冒頭の1音節のアクセント単位が下降調と平調とで弁別可能である。しかし、対応する共通語化形では、(15)bの弁別は不可能になる。これは、共通語化形が、語形だけでなく拍の等時性も共通語から借用しているため、(15)aでは可能な、下降調実現のための短い有声部の延伸が許されないからだと考える。

(14) a. 呼ん]]ぢょっ]] [ど / 読ん]ぢょっ]] [ど

b. 呼ん]]で]る [よ / 読ん]で]る [よ

(15) a. 鳴っ]]ぢょっ]] [ど / 生っ]ぢょっ]] [ど

b. 鳴っ]て]る [よ = 生っ]て]る [よ

多音節語と比べて相対的に長い1音節語や、1音節語を第1音節にもつ複合語では拍内曲調が比較的遅くまで維持されたとすれば、名義抄体系でのI-4/5、II-6/7各類の去声はじまりの語の残存も説明できる。

核の成立後のピッチ・アクセントの変化は、基本的には核の種類の変化であり、核の位置の変化や核の追加・消失は二次的な変化と見るべきではないだろうか。ピッチ・アクセント体系は変化を起こしにくい安定した体系であり、核の位置は九州から東北までよく共通性を保っているように思われる。

3.3. 改新としての琉球3型化

児玉(2014)では、ピッチ・アクセント化しなかった語声調体系では、アクセント変化は系列を単位とするものであったと考えた。系列の各型が経る変化は音節数に関わらず共通であり、型が統合する場合は系列全体が統合する。服部(1959)が認めた3類は、音節数が変わっても同系語は同じ系列に属する、という意味での系列性をもつ型の区別として松森晶子(2000)以降、3音節名詞まで拡大する試みが続いており、また、新たな3型体系の報告もあり、おそらく琉球祖体系が3型体系であったという説は近年ますます有力になっている。この琉球祖体系への変化は、(10)の、4つ（高平/下降・低平・緩昇・急昇）のメロディー対立と、低平以外は高結・低結の境界特徴の対立の組み合わせから成る7系列が、境界特徴の対立と、低平・緩昇のメロディー対立を失い、3つの系列に統合するものであるとみることができるだろう¹¹。

¹¹ II-4/5類以外にも報告されている琉球系列語彙と類別語彙の分裂対応については、特に3音節語での系列に流動的な部分もあり、琉球祖体系あるいはピッチ・アクセント祖体系のいずれかの改新や借用による可能性があるものとして、日琉祖体系に遡らないものと仮定する。

「種類の体系」としての語声調の変化は、音節声調や母音体系全体の推移と同様、弁別が維持されてさえいればさまざまな方向に進みえたと考える。隠岐3型や九州の2型体系は、地理的に狭い範囲での変異の幅が大きい、このような体系全体の変化が起きやすいことも原因となっているだろう。

各語声調はメロディーと境界特徴との組み合わせから成るが、メロディー対立を失い、境界特徴だけで型の弁別が維持される場合もあった。児玉(2014)では、鹿児島県本土の2型体系を、メロディーが共通で2種類の境界下降が対立する体系と分析したが、琉球方言では与那国の3型体系が主として境界の特徴で型が区別される体系として知られる。近年、先島諸島で新たに発見されたと報告されている3型体系も、語形単独では弁別が明らかでないが、連文節構造や複合語で型の区別があることがわかるとされているものが多く、これらのメロディー対立を失ったとみることになるだろう。

語声調体系の場合、系列全体として型の対立を失って型の数を減らすことになるが、琉球方言の場合、2型化する場合にもA/BCとAB/Cの2通りのパターンがある。これも、声調形のメロディーの推移によってどの型が似てくるのかが異なっているためであろう。最終的にすべての型の対立を失ったとみられる1型体系も奄美大島や宮古島などに分布している。この地域にも、語声調的でないピッチ・アクセント体系が報告されているが、いずれも独自の改新によって生じた体系であって祖体系にまでは遡らない可能性が強いと考える。

3.4. 側系統としての九州諸体系

児玉(2014)では、九州諸体系の祖体系を、下げ核の発生していない語声調体系と考え、これが発生する波状的变化がどこまで及んだかによって現在の体系の分布が成立したと論じた。しかし、祖体系からの系統分化を生じるような改新として、前節で述べたピッチ・アクセント化と琉球祖体系3型化の2つがあったとするならば、分布の解釈を大きく変えなければならない。

これらの改新を生じたかどうかと、2型化しているかどうかに応じて、次のような可能性がある。

- (16) a. 上げ核によるピッチ・アクセント化と降り核化を経る
b. ピッチ・アクセント化を経るが降り核化を経ない
c. ピッチ・アクセント化を経るが降り核化を経ず核を喪失して2型化する
d. ピッチ・アクセント化を経ずに独自に2型化する
e. ピッチ・アクセント化を経ず、琉球祖体系3型化を経て2型化する

九州外輪の体系は、(16)a で問題はない。降り核化は、本州側から及んだ波状的な変化であった可能性があることを本稿でも論じた。しかし、児玉(2014)で「連低類の高起化」、本稿でいう降り核化を経ていないと論じた諸体系については、ひとつにはピッチ・アクセント化を経たかどうかの検討が必要であるし、もうひとつは、2型体系とそれから生じた1型体系については、琉球祖体系の3型化を経てB類とC類が統合したとみてよいか、という二つの問題がある。

前者の問題は、ピッチ・アクセント化が(7)の上げ核体系に限るのかという問題もはらんでいる。対馬主流式と筑前式はともに、II-3、III-4類が無核的になる体系である。上げ核ではなく昇り核としてピッチ・アクセントが生じた場合には、語末までに上昇のないII-3、III-4類が無核となるはずである。II-1/2、III-1/2類は、非上昇であつただろうという推定しかできないが、高平式に限らず、下降式やくぼみ式の場合には高く始まったと予想されるので、昇り核体系であれば語頭核となった可能性が強い。

後者の問題は、ピッチ・アクセント祖体系無核型と有核型に対応する九州の2型化が、先に上昇調のII-4(1)・II-4(2)類、II-5(1)・II-5(2)類、III-6/7類の統合ではじまり、これと低平調のII-3、III-4類が合流したのか、琉球祖体系のように、まず緩昇調(II-4/5(2)類、III-5類)と低平調が合流したのか、という問題に置き換えれば、II-4(1)・II-4(2)類、II-5(1)・II-5(2)類の統合をもってピッチ・アクセント化であるとする本稿の立場では、(16)cと(16)dの差はほとんどないが、(16)cと(16)eのどちらであるかは、実は2型の体系ごとに違う可能性もある。しかし、すでに型が統合した2型体系から先行段階を見分けるのは不可能に近い。型の対応のずれを精査することや、また、本稿の論点からいえば、たとえば拍の等時性がこれらの方言で認められるかといった観点からの新たな分析手法を用いて、九州の2型アクセント体系全体や、隣接する諸体系を改めて見直してみる必要があるのではないかと考える。

比較言語学的な観点からたいへん興味深いのは、(16)b-dのような、二つの改新のいずれをも経ていない可能性のある体系が、九州にしか存在しないのではないかと、という点である。この仮説が正しいとすれば、ピッチ・アクセント化の改新も、琉球祖体系3型化の改新も、日本語がその分布を本州・四国や琉球列島まで広げる前に、九州で生じた改新である可能性が強い、ということである。

おわりに

以上、日本語アクセントの祖体系として7種類の系列が対立する語声調体系である(10)を再建した。再建される音調形は、名義抄体系のものと大きくは変わらない。従って、本土

のピッチ・アクセント体系で起きたと考えるアクセント変化も、想定する具体的な音形の変化は、名義抄体系を祖体系とみなす通説とそれほど大きく変わるものではない。また、日本語祖体系が日本列島に分布を広げて方言分化が始まってから平安時代後期に至るまで、アクセントに関してはあまり大きな変化がなかった、とする通説の仮定も、日本語祖体系をピッチ・アクセント祖体系に置き換えれば、本稿もほぼ踏襲しているといつてよい。

拙論で主に主張しているのは、音声的には曲調の消失のような微妙な違いであったとしても、音韻解釈（アクセント核がどんな種類の核であるのか、そもそも核をもっている体系なのか）が変わることにより、アクセントの可能な異音的实现の幅も変わり、その結果、可能なアクセント変化が大きく変わりうる、ということである。

この点は、アクセント変化の解釈に大きな影響を及ぼす。一例をあげる。上野(1988, 2006)で展開された、無核型に下降式を祖形として立てる仮説は、通説の、下げ核の発生を低平調からの語頭隆起に限定する見方から脱却した点で、非常に重要な仮説である。しかし、下降調から高平調への変化は起きやすい変化であるが、高平調から下降調への変化は起きにくいという理由付けで、祖体系に下降調を再建することは、アクセント核のない無核型を語声調の一種とみなす立場では首肯できない。「式」が声調体系である以上、声調変化としては、高平調が下降調に変わる変化も、高平/上昇の対立が、上昇調の上昇性の消失によって下降/平進の対立に変わるというような変化を想定すればじゅうぶん可能であり、また上昇型と対立して高平調と下降調が変異形となることも想定しうる。琉球諸方言や九州にみられる語声調体系のアクセント変化を再建する場合には、ピッチ・アクセント体系と異なる枠組み（メロディーと境界特徴）が必要になるのではないかと考える。ピッチ・アクセント祖体系で核がどこにあったのかを再建することは可能であるとしても、語声調体系の場合は、内的に祖形の音調を再建することは困難である。日琉祖体系とは、ピッチ・アクセント体系が分岐した時点での（ピッチ・アクセント再建形に基づいた）音調の再建であるが、それに先立つ段階でも同じ音調であり声調変化がなかったと考える根拠はどこにもない。

祖体系にピッチ・アクセント的体系を想定するか、語声調体系を想定するかで、祖体系以前の変化、つまり、他言語との比較言語学的関係を視野に持つ日本語系統論の仮説も大きく変わってくる。拙論では、複合語形成や文節アクセント形成などのアクセント単位拡大の変化は祖体系の分岐以降の個別的な改新とみなして、3音節までの語形が声調対立を成す体系を想定するが、この前段階として考えうるのは、音節声調言語が声調拡散により語声調をもつようになる変化である。この仮説をとるならば、大陸側に声調言語は多いが、

その多くに *tonogenesis* 的過程が仮定され、祖体系段階では声調言語でなかったとされるものが多い中に、新たに声調言語を祖体系とする言語が（おそらくパプア・ニューギニアではなく大陸側に）存在したと主張することになる。

日本祖語の声調発生論のうち、II-5 類を語末子音に由来するとするポリワーフ以来の説は、語末境界声調対立(高結式・低結式)の起源の問題として、同系仮説を立てる他言語の分節音との対応を問題にできる可能性もあると考える。しかし、服部(1979)の長母音仮説を採用して、高起側の A 類を無声語頭子音、低起側の B 類と C 類を語頭有声子音と語頭長母音音節に結びつける Alexander Vovin(2008)のメロディー側の *tonogenesis* 仮説に関しては、語末長母音を認めない立場からは否定的にならざるをえない。

拙論では大きな位置を占める「拍の等時性」、つまり、曲調と平調の対立が、同じ 1 モーラ音節での音量対立を音声的変異として許容するかどうかの問題は、アクセントのような方言比較を可能にするデータがない。談話資料の収集によって将来の分析を可能にする体制を整えておくことが、この日本語の音韻を特徴付ける性質の成立過程を明らかにしていくためにも急務といえるのではないだろうか。

謝辞

長田俊樹先生には、研究会での発表の機会を与えていただくにとどまらず、故長田夏樹先生御所蔵のアクセント関係の論文・抜き刷り多数を長期に亘ってお貸しいただき、往時のアクセント研究の熱気を感じることができた。

参考文献

- de Boer, Elisabeth M.(2010) *The historical development of Japanese tone*. Otto Harrassowitz.
- Frellesvig, Bjarke and John Whitman (eds.) (2008) *Proto-Japanese: issues and prospects*. Amsterdam: John Benjamins.
- 服部四郎(1931)「国語諸方言のアクセント概観(三)」『方言』1(4).11-27.
- 服部四郎(1937)「原始日本語の二音節名詞のアクセント」『方言』7(6).44-58.
- 服部四郎(1951)「原始日本語のアクセント」寺川喜四男・金田一春彦編『国語アクセント論叢』43-65.
- 服部四郎(1954)「音韻論から見た国語のアクセント」『国語研究』2.2-50.
- 服部四郎(1959)『日本語の系統』. 岩波書店.

- 服部四郎(1973)「アクセント素とは何か? そしてその弁別的特徴とは? —日本語の“高さアクセント”は単語アクセントの一種であって, “調素”の単なる連続にあらず—」『言語の科学』 4.1-61.
- 服部四郎(1979)「日本祖語について(21)」『言語』 8(11). 97-107.
- 早田輝洋(1968)「日本語諸方言のアクセント」『NHK 文研月報』 18(10). 40-61.
- 早田輝洋(1997)「平安時代京畿方言アクセントに関する幾つかの問題」『音声研究』 1(2). 37-44.
- 早田輝洋(1999)『音調のタイポロジー』東京:大修館書店.
- 平子達也(2015)「日本語アクセント史の再検討: 文献資料と方言調査にもとづいて」京都大学博士論文
- 平山輝男(1957)『日本語音調の研究』. 明治書院.
- 平山輝男・中本正智(1964)『琉球与那国方言の研究』. 東京堂.
- 川上夔(1953)「「花高し」と「鼻高し」—東京アクセント段階観の限界」『音声学会会報』 82.6-9.
- 川上夔(1997)「高さアクセントの記述一段,向き,契機,核など」『音声研究』 1(2).20-27.
- 川上夔(2000)「日本語アクセントのトーン性」『音声研究』 4(3).28-31.
- 木部暢子(2008)「内的変化による方言の誕生」『シリーズ方言学 1 方言の形成』43-81.東京:岩波書店.
- 木部暢子(2010)「方言アクセントの誕生」『国語研レビュー』 2.23-35.
- 金田一春彦(1937)「現代諸方言の比較から観た平安朝アクセント—特に二音節名詞に就て—」『方言』 7(6).1-43.
- 金田一春彦(1954)「対馬 附 壱岐のアクセントの地位—九州諸方言のアクセントの対立はどうしてできたか」九学会連合対馬共同調査委員会『対馬の自然と文化』.
- 金田一春彦(1960)「アクセントから見た琉球語諸方言の系統」『東京外国語大学論集』 7.59-80.
- 金田一春彦(1972)「隠岐アクセントの系譜」『現代言語学』 615-650. 三省堂.
- 金田一春彦(1977)「アクセントの分布と変遷」『岩波講座日本語 11 方言』 129-180. 岩波書店.
- 児玉望(2014)「九州におけるアクセント変化の再建—境界特徴に着目して」『音声研究』 18(3), 27-42.
- 児玉望(2015)「隠岐 3 型アクセントの再検討」『熊本大学言語学論集』 14.1-36.

- 松森晶子(1993)「日本語アクセントの祖体系再建の試み」『言語研究』103.37-91.
- 松森晶子(2000)「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発— 沖永良部島の調査から」
『音声研究』4(1). 61-71.
- 松倉昂平(2014)「福井県あわら市のアクセント分布」『東京大学言語学論集』35. 141-154.
- 新田哲夫(1985)「加賀地方における2モーラ名詞アクセントの変遷」『国語学』140.119-103.
- ポリワノフ(1976)『日本語研究』(村山七郎訳) 弘文堂.
- ラムゼイ, S.R. (1980)「日本語アクセントの歴史的変化」『言語』9(2). 64-76.
- 柴田武(1955)「日本語のアクセント体系」『国語学』21.44-69.
- 上村幸雄(1959)「琉球諸方言における「1・2音節名詞」のアクセントの概観」『ことばの
研究』1:121-140.
- 上野善道(1975)「アクセント素の弁別的特徴」『言語の科学』6. 23-84.
- 上野善道(1984)「N型アクセントの一般特性について」『現代方言学の課題』2(記述的研究
篇). 167-209. 明治書院.
- 上野善道(1988)「下降式アクセントの意味するもの」『東京大学言語学論集'88』35-73.
- 上野善道(1989)「日本語のアクセント」『講座日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻』
(上). 178-205.
- 上野善道(1992)「昇り核について」『音声学会会報』199: 1-13.
- 上野善道(2006)「日本語アクセントの再建」『言語研究』130.1-42.
- 上野善道(2012)「N型アクセントとはなにか」『音声研究』16(1), 1-4.
- Uwano, Zendo (2012) 'Three types of accent kernels in Japanese'. *Lingua*. 122. 1415-1440.
- 上野善道(2013)「琉球与那国方言のアクセント資料(2)」『琉球の方言』37: 109-142.
- Vovin, Alexander (2008) 'Proto-Japanese beyond the accent system'. In: Frellesvig and Whitman
(2008), 141-156.
- ウェイン・ローレンス(2009)「北琉球祖語の名詞音調一試論」『沖縄文化』43(2):86-102.
- 屋名池誠(2004)「平安時代京都方言のアクセント活用」『音声研究』8(2). 46-57.
- 国立国語研究所編(1963)『沖縄語辞典』東京：大蔵省印刷局.
- 仲宗根政善(1983)『沖縄今帰仁方言辞典』東京：角川書店.
- 生塩睦子(2009)『沖縄伊江島方言辞典』新版. 伊江：伊江村教育委員会.
- 名護市教育委員会市史編纂委員会編(2006)『言語』. 名護：名護市教育委員会.